

# 旭川市「旭山動物園」を視察して

岩国市議会議員 渡 吉弘

## 1 はじめに

北海道では、観光という分野が直接、または間接的に多くの企業が関わりを持つことから、行政と民間が一体となって観光に力を入れ、異業種間の交流等を積極的に行い、意見を出し合っている。そして、小さなアイデアを具体的な形として実行することが重要であり、新たな事業連携が地域の活性化及び北海道観光自体の活性化に結びつくことを実感し、様々な取り組みを行なっている。

観光が団体型から個人型へと推移する中、多様化するニーズに合わせたサービスの向上と受け入れ体制の確立に努力をしながら、これまで出されてきた案をどのように実現するのか。そして、具体的にするための仕組みづくりをどのように行なっていくかが次段階への課題とされている。

今回は、いま日本中から注目されている旭川市の「旭山動物園」を訪れて、観光地としての集客方法、動物園で様々な試みを視察してきた。

## 2 旭川市について

旭川は山岳丘陵に囲まれ、東側に大雪山連峰を望む北海道第二の都市であり、基盤の目のように整然と区画された街並みが続く、自然豊かな街である。

郊外には旭川空港があり、人気の観光地「美瑛」・「富良野」・「層雲峡」などに行く人の中継地・出発点でもある。

JR 旭川駅から北へは平和通買物公園という大きな通りが続き、真っ直ぐにのびる道の真ん中には彫刻や花壇が並び、行き交う人の目を楽しませている。今回訪れた旭山動物園へは、そこから約40分バスに揺られて到着した。

## 3 旭山動物園について



### 「旭山動物園」受難のとき

「旭山動物園」は道内三番目、「日本最北の動物園」として1967年7月に開園した。初年度の入園数は約46万人。その後も着実に入園者は増え続けたが、1983年度の約60万人をピークに、減少し始めた。

入園者の減少は、動物園の維持・管理という面に大きな影を落とし始め、年間約4億円という動物園の経費に対し、市議会の一部議員から「市のお荷物論」「動物園不要論」がだされた。

市民の間にも「民間委託」の計画の噂が流れたり、動物園には維持管理費や人件費など、維持していくのに最低の予算しかつかない時代が続いた。

しかし、このような逆風が吹く中でも、旭山動物園の関係者・職員達は、「理想の動物園」を作る努力を決して怠らなかった。そして、「動物園とはこんな素晴らしいところ」ということを地元の子ども達に発信し続けた。

担当飼育係による「ワンポイントガイド」や夏休みの小学生を対象にした「サマースクール」などがそうだし、来場者には手書きの「情報板」の設置し、動物の情報を伝え続けた。つまり、スタッフ自らが手づくりで費用をかけずに動物園を身近に感じて頂く努力を始めたのである。

しかし残念ながら、1994年夏に思わぬ「大騒動」が勃発したのである。7月19日にローランドゴリラが、そして8月23日にはワオキツネザルが相次いでエキノコックス症で死亡したのである。

動物園はお客さんに安心して来てもらう所なので、こうした事実を隠すわけにはいかなかった。それで、動物園は8月27日に突然途中閉園することになった。

そして、このエキノコックス症の後遺症は大きかった。動物園は、例年通り4月に再開したが、その年1995年度の入園者は約28万3千人。そして、1996年度には開園以来最低の26万人に落ち込んだ。

「旭山動物園」に春の訪れ



1995年3月、エキノコックス症での途中閉園に追い込まれたという「衝撃的な出来事」が未ださめやらない頃、現在の小菅園長が就任した。

小菅新園長は、4月に園内に「手づくりのミニ牧場」を登場させた。これは飼育係が自分達自身で、旧シカ舎を改造し「ふれあい広場」と名付け、アヒルやウサギを放し飼いにしたのである。

この牧場は「子ども達に動物の抱き方や餌やりを学んでもらい、動物の素晴らしさ、動物と触れあう楽しさを感じてもらいながら、人と自然とのかかわりに目を向けてもらうのが動物園の役割である。」という、菅野前園長の思いを形にした施設だった。

入園者数は、相変わらず低迷していたが、動物園の本来の目的をしっかりと受け継ぎ、その形を新園長が伝え、確実に具現化させようと努力していた。

そして、あの忌まわしい「騒動」が起こった年から約10年が経過した、2004年9月。ついに旭山動物園は、年間入園者数100万人を突破したのである。

全国的に動物園の人气が低迷する中、「行動展示」というユニークな手法で全国の注目を集め、入園者数を増やし、「地域再生の手本」ともいわれるようになったのである。

#### 4 「旭山動物園の」動物園の魅力・「行動展示」について

入園者回復のきっかけとなったのは1997年4月に「こども牧場」としてオープンさせた施設である。これは上でも述べたが、2年前にスタッフが手づくりした「ふれあい広場」を整備したものである。

入園者数が減る中での動物とのふれあいは、たちまち子ども達の人気となった。就任一期目だった、現市長の菅原功一市長もしばしば「広場」に足を運び、市長が動物園の取り組みに理解を示した。

そして、1997年が開園30周年に当たっていたことも重なり、施設の新規整備などの予算が付き始めた。





次なる一手として、動物園は 1997 年度の「ととりの村」もオープンと共に「年間パスポート」を導入した。

これは、何度も足を運んでもらい、季節による動物の生態の違いを観察してもらおうのが狙いだった。

「子ども牧場、ととりの村、パスポート」という3つの取り組みを集中させた 1997 年度に、入園者は過去最低だった前年度を約 4 万 5 千人上回り、4 年ぶりに 30 万人台を回復した。

そして、入園者の数も少しずつ回復し、2003 年度には約 82 万人の方達が動物園を訪れた。

その最高だった入場者数が 100 万人を超えるきっかけを作ったのが、全国的な話題となったペンギン・ホッキョクグマ・アザラシ・オランウータンという、旭山動物園の「人気者達」である。この決して珍しくはない動物達が人気者となったのは、旭山動物園独自の「行動展示」という見せ方の工夫があったからである。

動物の姿形を見せる従来の「形態展示」に対して、動物本来の行動や能力を見せるのが「行動展示」。さらに、旭山動物園では、できるだけ自然に近い状態で見せようという「生態展示」の要素も併せ持たせているのである。

その最たるものが、1997 年 9 月に登場した巨大な「鳥かご」。すなわち、人間が中に入って、鳥たちの生態を観察する「ととりの村」である。

他の動物園では、鳥が飛ばないように羽の一部を切るが、ここでは鳥の飛び能力、自然の姿を観察するため、鳥は自由に空を飛び、人間が大きな籠と一緒に空を飛び鳥を観察するのである。

以後、「行動展示」「生態展示」の施設整備は続いた。トラやライオン、ヒョウなどの生息環境に近い放飼場で見せる「猛獣館」。水中トンネルから飛ぶように泳ぐペンギンを観察する「ペンギン館」。木の上で生活するオランウータンをありのまま見せる「空中運動場」。ホッキョクグマの餌になった感覚を体験できる半球状のドーム窓や飛び込みのプールを設けた「北極熊館」。

次々と整備される斬新な展示施設は話題を呼び、入園者数は年々増加した。そして、いつも長蛇の列ができていく「アザラシ館」。好奇心旺盛なアザラシの特徴を利用し、円柱のガラス水槽設置した。アザラシが上下に行き交う可愛らしい姿。まるで我々人間がアザラシの家族に観察されているような錯覚に陥る。



これまでにない「見せ方」に感心しながら、次第にその面白さに魅せられていく。これがこの動物園の「売り」なのである。

## 5 今後の「旭山動物園」について

旭山動物園の数々の魅力。その一つが、飼育展示係が担当動物について解説する日祝日恒例の「ワンポイントガイド」。集まった入園者を前に、担当者がその体の特徴から生態、繁殖方法などを解説する。ワンポイントガイドは「その動物を一番よく知る担当者が話をすることで動物本来の姿を伝えよう」と、1986 年に始まった旭山の学習教育活動の

一つの柱である。

ユニークな施設と展示方法にばかり注目が集まりがちな旭山動物園だが、変わらぬものは職員たちの「手づくり」の取り組み。これが旭山のもう一つの魅力である。

菅原旭川市長は、今後更に川や池、樹木などを整え、その行動特性が十分に観察できる新施設構想「チンパンジーの森」。そして、今まで温めている構想「石狩川水系淡水生態館」を記者発表した。これは、石狩川周辺に生息する鳥類や小動物、淡水魚などの総合的な展示を目指す施設である。

しかし、他の自治体と同様に旭川市も厳しい財政運営を迫られている。「チンパンジーの森」や淡水生態館構想は「7年計画で整備」との方針が示されただけで、構想実現にはまだまだ時間がかかりそうである。

また、入園客で休日は常に満車状態となる駐車場や老朽化したトイレ、道路渋滞を起こす周辺道路環境の整備など緊急の課題も多い。

これからの動物園は、レクリエーション、自然保護、研究、教育活動という、4つの機能が確実に求められる。生き物たちからいろんなことを学ぶための動物園づくり。これが今後の旭山動物園に科せられた課題である。

## 6 おわりに

観光に力を入れている岩国市でも、観光に関する大きな問題が起ころうとしている。それは、岩国を訪れてくれる「観光客の減少」という問題である。

錦帯橋を渡る観光客の数は、架け替え完成から1年間は過去最高の100万人を突破した。しかし、最近では架け替え効果も徐々に薄れ、今年度は入橋者数が70万から80万人まで落ち込むのではないかと心配されている。

このような状況を打開するためには、錦帯橋周辺を魅力のあるものにする「仕掛け」や「観光宣伝」が必要である。岩国が持つ歴史的特長の発信や、錦帯橋を中心とした将来構想、そして、歴史的街並みの整備や既存施設の修復など、周辺整備も必要である。

ところが、市議会が行政が打つ観光に関する様々な政策を否定し続けている。宇野千代記念館の構想や周辺整備の条例、宇野千代生家の取得や「錦帯橋資料館(仮称)」に関する議案の否決あるいは修正がそうである。

地元出身の女流作家が遺した貴重な資料やその生家を利用した観光資源の確保や50年ぶりに行われた「平成の架け替え」で新たに手に入れた貴重な資料を残しながら、訪れる方々に錦帯橋の魅力を知って頂くという観光資源の再発見・再発掘が急務であるときに、このような状態では先が思いやられるというものである。

そして、さらに大切なことはマスコミを利用した宣伝効果である。旭山動物園の盛況ぶりは、上で述べたような動物園関係者の絶え間ない努力と「美瑛・富良野」を後ろに控えた「地の利」とマスコミが盛んに発信してくれ情報と「露出」され続けた魅力である。

これだけの自然の美しさと恵まれた観光資源を持つ岩国にとって、まだまだ不足しているのが、マスコミに対する「露出度」と売り込みに要する努力である。

観光岩国の魅力を全国に紹介するための努力。これが岩国に科せられた課題であることを知らされた今回の視察であった。

(写真提供 旭山動物園) 2005.10.14